

2025 年燧灘カタチイワシ漁況予報

2025 年 7 月 10 日
香川県水産試験場

1. 水 温

2025 年 1～6 月の燧灘東部における水深 10m 水温は、平年と比較し、1～2 月は「平年並み」、3～4 月は「やや低め」、5～6 月は「平年並み」で推移している。

※平年値の算出期間：2015 年から 2024 年までの 10 年平均

平年並み : $0\sigma \leq \text{平年偏差} < 0.6\sigma$ (σ : 標準偏差)
やや高め (やや低め) : $0.6\sigma \leq \text{平年偏差} < 1.3\sigma$
かなり高め (かなり低め) : $1.3\sigma \leq \text{平年偏差} < 2.0\sigma$
著しく高め (著しく低め) : $2.0\sigma \leq \text{平年偏差}$

カタチイワシは水温が約 13℃以上になると産卵を始めることが知られており、今年は、5 月頃から産卵が始まったものと考えられる。

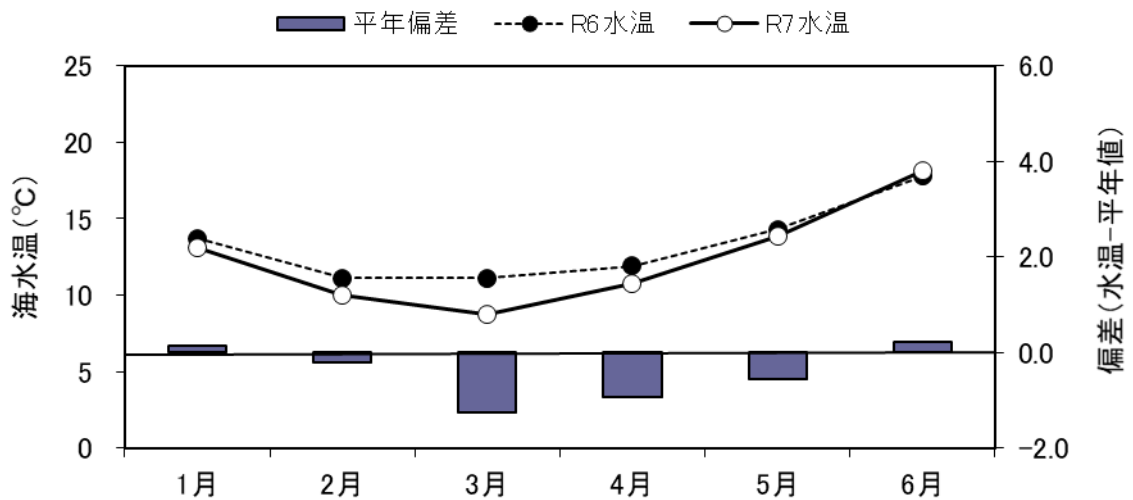


図. 燧灘における 10 m 水温

2. カタクチイワシ卵および仔魚の出現状況

カタクチイワシ卵および仔魚の出現状況について調べるため、4月上旬から6月下旬の間に計6回の卵稚仔調査（浅海定線調査を含む）を行った。なお、卵・仔魚の採集はマルチBネット（口径45cm，目幅0.33mm）の鉛直曳きで行った。

卵及び仔魚密度は，全調査日で前年及び平年を下回った。

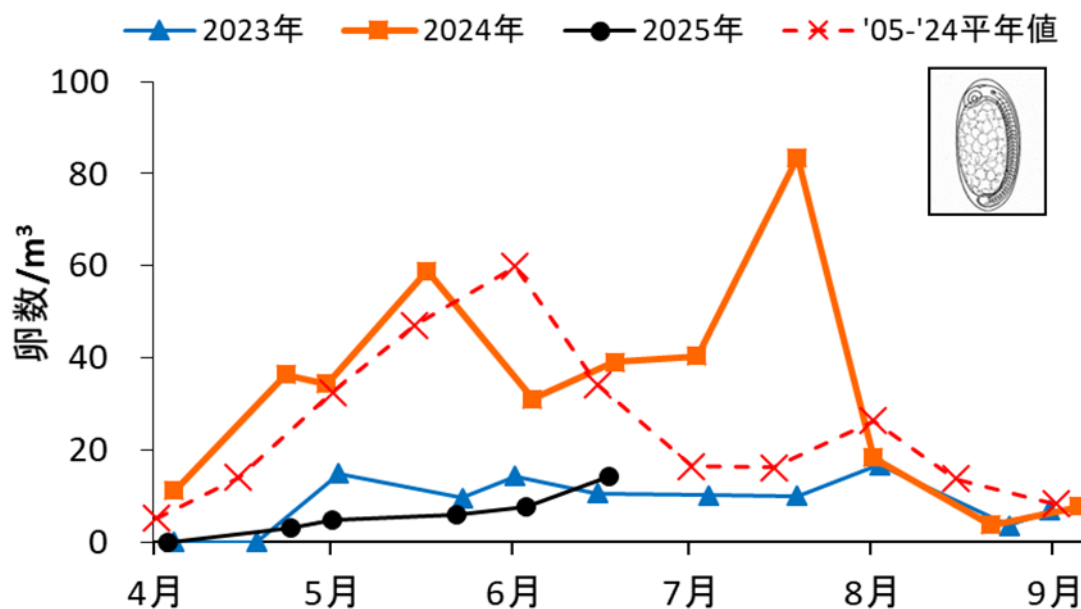


図. カタクチイワシ卵密度の推移

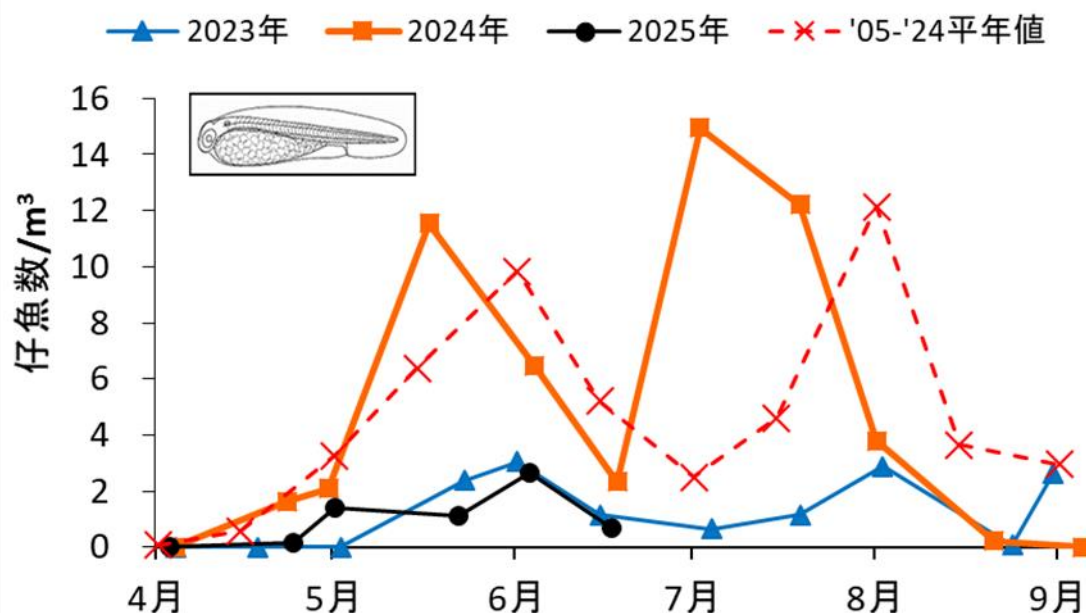


図. カタクチイワシ仔魚密度の推移

3. プランクトンの出現状況

カタクチイワシ成魚の主餌料であるカイアシ類成体密度については、6月上旬調査時まで平年を上回って推移したが、下旬になると平年を下回った。

また、5月におけるカタクチイワシ雌親魚肥満度は10.6となり、平年の9.1（直近10年間の平均値）を大きく上回った。

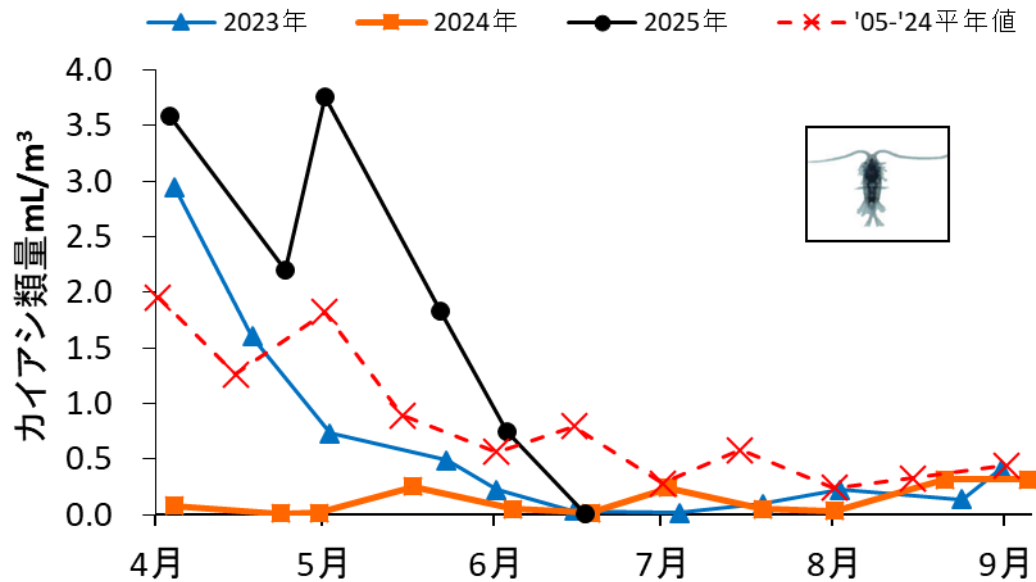


図. カイアシ類成体（335μm 以上）密度の推移

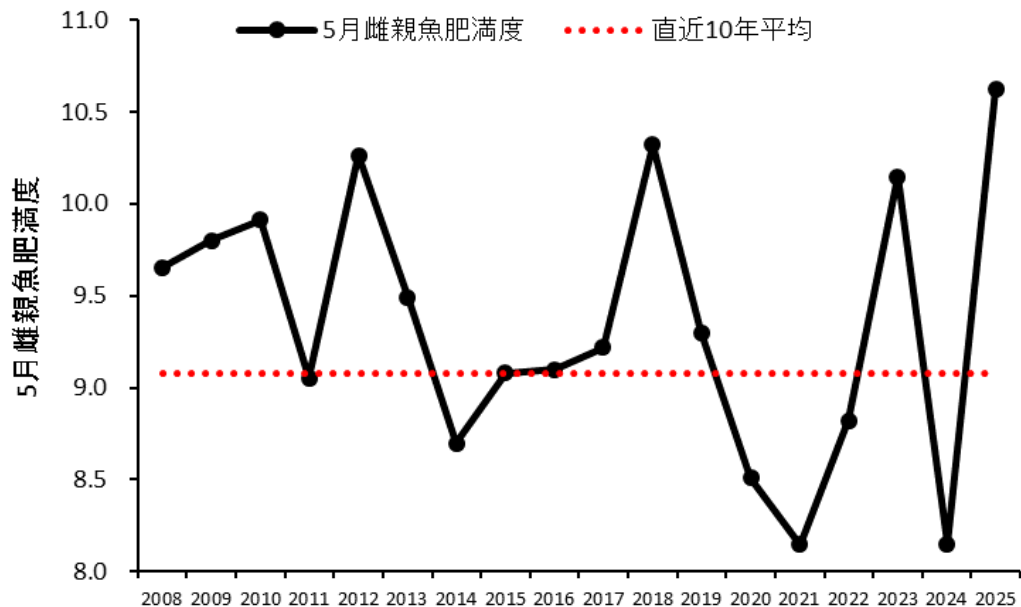


図. 5月におけるカタクチイワシ雌親魚肥満度の推移

4. カタクチイワシ漁期予報

6 月下旬から漁獲されるチリメンは、5～6 月に燐灘で産卵された卵がふ化、成長したものである。この時期のカタクチイワシは 1 日 0.6～1.0 mm 程度で成長し、漁獲サイズの 30 mm に成長するのは、ふ化してから約 25～35 日後と考えられる。したがって、早いものでは、5 月下旬にふ化したものが 6 月下旬頃からチリメンとして加入し始めるものと推定される。

○カタクチイワシ仔稚魚の加入量予測

卵及び仔魚密度は、平年を下回った。今年度は 5 月まで低水温が続き、産卵が遅れたことが原因として考えられる。

また、餌料環境について、カタクチイワシ成魚の主餌料であるカイアシ類成体密度は 6 月下旬を除き、平年を上回った。また、5 月中はカイアシ類成体密度が平年を大きく上回っていたため、カタクチイワシ雌親魚肥満度も平年を大きく上回った。

さらに、ボンゴネット（口径 60 cm、目幅 0.33 mm）往復傾斜曳により、仔魚を採集し、5 月における仔魚期の日間生残率（% day⁻¹）を求めたところ 78.9% となり、平年の 41.9% を大きく上回った。一般に、雌親魚肥満度が高いほど、卵質が良くなり、仔魚の生残率は高くなるが、5 月における雌親魚肥満度が高かったことで、仔魚の日間生残率も高くなったと考えられる。

これらのことから総合的に判断すると、今年度のカタクチイワシ仔稚魚の加入量は、平年を上回ると考えられる。

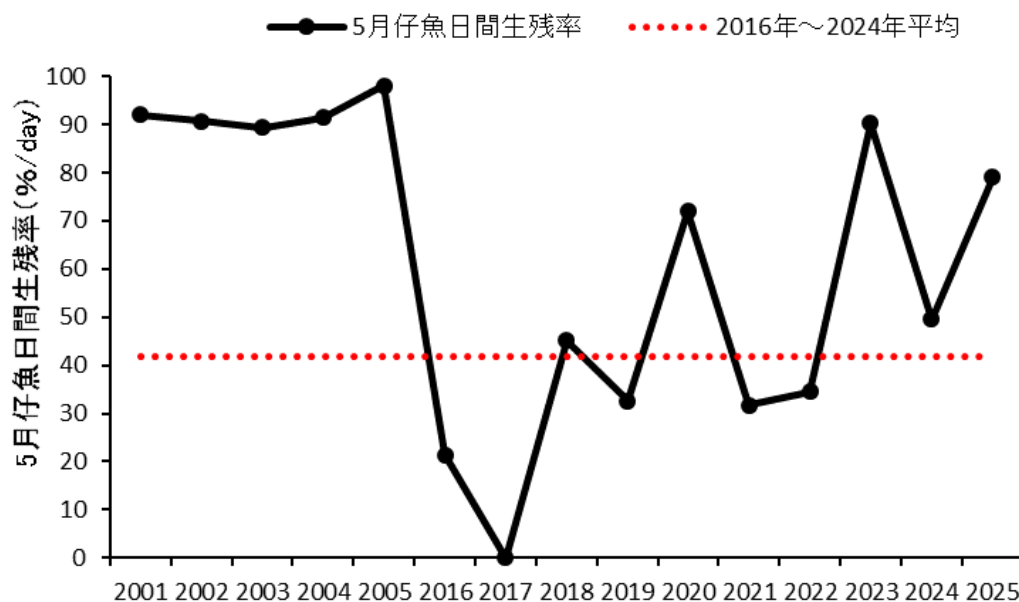


図. 5 月におけるカタクチイワシ仔魚日間生残率の推移